

対人援助技術の習得をめざした体験教育の展開(2) —高齢者教室での15年間の臨床動作法実践を振り返って—

長野 恵子・花田 利郎

(西九州大学)

(平成16年12月2日受理)

Experiencing-oriented Education to Acquire Helping Method(2) :
Fifteen Year Review on the Practice of Dohsa-method for Aged People

Keiko NAGANO, Toshirou HANADA

(Graduate School of Health and Welfare Science, Nishikyushu University)

(Accepted December 2, 2004)

Abstract

The purpose of this paper was to examine the effects of the experiencing-oriented education for the acquisition of helping method. We held activities for aged people 110 times in fifteen years (from 1989 to 2003) as a seminar class of the social welfare study.

The activities were designed to fulfill following purposes.

- (1) (for students) education : acquisition of helping method based on Dohsa-method for aged people
- (2) (for aged people) contribution to community : learning a skill maintaining their own health
- (3) (for researchers) investigation : development of new helping method

It was pointed out that the experiencing-oriented education in these activities had positive influence on nurturing abilities of understanding aged people, developing communication skills and managing group activities.

Key words : experiencing-oriented education 体験教育
helping method 援助技術
Dohsa-method 動作法
aged people 高齢者

1. はじめに

平成元年（1989年）から始まった「高齢者教室（高齢者の心とからだの動きを活性化する教室）」は既に15年間を経過した。当初、実践力を持った学生を育てるためには、外部施設での実習のみならず、大学内において直接高齢者と学生が触れ合う場があれば、という思いがあった。

開始当時はゴールドプラン（高齢者保健福祉推進10ヵ年戦略）が提起され、これから迫り来る高齢社会へ向けてマンパワーの確保、施設数の拡大が推進され、社会福祉士・介護福祉士の国家試験がスタートした年でもあった。また「寝たきり老人ゼロ作戦」が謳われ、高齢者自らもいかに健康に老いていくかへの関心が高まっている状況であった。

初回は、高齢者の参加者15名、学生16名でスタートした一つの演習授業としての小グループが、今や高齢者の参加者は70名に増え、2グループに分かれて実施している。

開始時点から15年間通して継続して行なってきた柱の一つは臨床動作法であった。臨床動作法は1960年代半ばに成瀬悟策を中心とする研究グループによって開発された心理学的援助法である^{1) 2)}。この方法は、言葉を媒介とするのではなく動作を援助の手段として用いて、からだの持ち主である主体に働きかけるものである。1989年当時は肢体不自由児からさらには知的障害、自閉症、神経症、精神障害の人へと適用がなされ、すでに老人病院等で高齢者への個別適用も試みられていた^{3) 4)}。本学では在宅で自立した生活を営む高齢者に対して臨床動作法を行なうことを通して、高齢者のこころとからだの活性化をはかると同時に、学生の対人援助技術の体験的習得を狙いとしてスタートした。

しかし、この間に上述したような参加者の増加に加え、大学のカリキュラムの変更、担当教員の変遷を経て、臨床動作法だけでなく平成7年度より福祉レクリエーションが高齢者教室のプログラムの前半部を担うようになり（この経過はすでに報告されているが^{5) 6)}）、平成12年度からは化粧療法、15年度からは健康栄養学科による調理教室が始まり、次第にプログラムも多様化していった。そして平成16年度からは高齢者との交流による学生教育の一環として、社会福祉学科のみならず健康栄養学科も含めた全学的取り組みとしてこれまでの活動を新展開すべく、内容を一新し、名称も「チャレンジ幸齢セミナー」として再スタートした。

本報においては平成元年～15年度までの「高齢者教室」としての実施経過をレビューするとともに、臨床動作法を通じた対人援助技術の習得をめざした体験教育における学びについて検討したい。

2. 高齢者教室の15年間の経過

(1) 目的

教育、地域貢献、研究の3つの側面から高齢者教室を実施してきた。

- ① 実践、実技力を伸ばす授業作りとして、臨床動作法に基づく対人援助技術の習得をめざす体験教育
- ② 地域に役立つ大学作り、生涯学習の一環として、高齢者の心身の健康を維持するための学びの場
- ③ 研究面からは、高齢者に対する臨床動作法の適用をとおした新たな対人援助技術の展開

以上の3点を目的とし、社会福祉援助技術演習（4年生）の授業の一環として、学生が一人ずつ高齢者を担当し1対1での面接ならびに臨床動作法の実践を行った。

（なお、③に関してはすでに多数の報告がある^{7) 8) 9) 10) 11) 12) 13)}）

(2) 参加者数の推移

これまでの参加者数の推移を表1と図1で示す。

平成4年度までは高齢者の参加者はほぼ10名前後で横ばいであったが、平成5年度から徐々に参加者が増えていき、平成6年度に健康福祉実践センターが開所し、広がったことにより、さらに増え続け平成7年度は毎回30～40名に達し、1対1での対応が困難な回がでてきた。参加者は初回のみ神埼町内の老人会や新聞を通して広報による募集を行ったが、その後は継続参加であり特に募集は行っておらず、参加者間の口コミによって増えていった。

そこで、平成8年度からはA、Bの2グループに分けて、さらに学生数とのバランスをとり、A、Bそれぞれ4回ずつ年間8回実施することにし、平成15年度までこの規模と回数が続いた。

介護者に関しては、ホームヘルパーや施設職員が研修の場として参加する場合であり、平成7年度からは特別養護老人ホームの利用者（入所者）が施設職員同伴でこの教室に参加するようになった。

学生数は、平成3年度からは倍増しているが、それまで1つの演習で担当していたものが、この年度から2つの演習で実施するようになったためである。この演習に関する経緯は次に示すとおりである。

(3) 担当教員と内容の変遷

表2に示すとおり、平成12年度以降は年間8回の内に化粧療法や料理教室が入り、プログラムが多様になってきた。

表1 高齢者教室 参加者数

単位：数（名）

開催回数	実施年月日			高 齢 者	高齢者累積	介 護 者	介護者累積	学 生	学生累積
	年	月	日						
1	1989	6	8	15	15	7	7	16	16
2	1989	6	22	15	30	8	15	10	26
3	1989	10	26	5	35	8	23	7	33
4	1989	11	9	7	42	3	26	6	39
5	1989	12	14	8	50	5	31	10	49
6	1990	6	14	9	59	6	37	11	60
7	1990	6	28	8	67	6	43	14	74
8	1990	7	14	7	74	1	44	8	82
9	1990	10	11	9	83	5	49	10	92
10	1990	10	25	10	93	4	53	12	104
11	1990	11	29	9	102	4	57	8	112
12	1990	12	13	9	111	4	61	11	123
13	1991	1	24	6	117	6	67	19	142
14	1991	5	23	9	126	7	74	49	191
15	1991	6	6	11	137	6	80	26	217
16	1991	7	4	11	148	8	88	32	249
17	1991	10	3	6	154	4	92	42	291
18	1991	11	7	10	164	4	96	41	332
19	1991	12	5	10	174	6	102	34	366
20	1992	1	16	8	182	5	107	32	398
21	1992	5	28	11	193	7	114	34	432
22	1992	6	18	12	205	5	119	34	466
23	1992	7	9	8	213	6	125	37	503
24	1992	10	22	7	220	2	127	34	537
25	1992	11	19	9	229	1	128	28	565
26	1992	12	10	9	238	5	133	37	602
27	1993	1	20	9	247	5	138	31	633
28	1993	5	27	14	261	4	142	41	674
29	1993	6	24	19	280	5	147	45	719
30	1993	7	8	19	299	2	149	51	770
31	1993	10	14	16	315	1	150	39	809
32	1993	11	18	18	333	4	154	39	848
33	1993	12	2	19	352	5	159	46	894
34	1994	1	20	16	368	6	165	40	934
35	1994	5	19	19	387	10	175	41	975
36	1994	6	16	21	408	8	183	43	1018
37	1994	7	14	21	429	6	189	43	1061
38	1994	10	13	25	454	8	197	54	1115
39	1994	11	17	16	470	5	202	42	1157
40	1994	12	8	28	498	5	207	42	1199
41	1995	5	25	39	537	8	215	45	1244
42	1995	6	29	35	572	15	230	48	1292
43	1995	7	6	35	607	11	241	57	1349
44	1995	10	12	40	647	6	247	46	1395
45	1995	11	16	34	681	5	252	44	1439
46	1995	12	14	42	723	5	257	43	1482
47	1996	5	16	21	744	8	265	48	1530
48	1996	6	6	17	761	6	271	49	1579
49	1996	6	27	32	793	10	281	55	1634
50	1996	7	18	14	807	5	286	45	1679
51	1996	10	17	30	837	11	297	42	1721
52	1996	11	14	11	848	—	—	—	—
53	1996	11	28	16	864	1	298	43	1764
54	1996	12	19	13	877	1	299	43	1807

55	1997	5	15	14	891	4	303	35	1842
56	1997	5	29	16	907	0	303	45	1887
57	1997	6	19	20	927	8	311	52	1939
58	1997	7	10	14	941	1	312	50	1989
59	1997	10	16	11	952	7	319	49	2038
60	1997	11	6	14	966	1	320	38	2076
61	1997	11	27	15	981	6	326	43	2119
62	1997	12	11	18	999	3	329	54	2173
63	1998	5	14	15	1014	0	329	53	2226
64	1998	6	4	19	1033	1	330	51	2277
65	1998	6	25	15	1048	0	330	35	2312
66	1998	7	9	15	1063	1	331	36	2348
67	1998	10	22	17	1080	1	332	50	2398
68	1998	11	5	17	1097	0	332	52	2450
69	1998	11	26	17	1114	0	332	49	2499
70	1998	12	10	16	1130	0	332	53	2552
71	1999	5	20	20	1150	4	336	54	2606
72	1999	6	10	19	1169	1	337	53	2659
73	1999	6	24	23	1192	4	341	53	2712
74	1999	7	8	20	1212	1	342	48	2760
75	1999	10	7	20	1232	3	345	47	2807
76	1999	11	11	17	1249	2	347	47	2854
77	1999	11	25	19	1268	3	350	51	2905
78	1999	12	9	17	1285	1	351	52	2957
79	2000	5	18	20	1305	3	354	47	3004
80	2000	6	8	27	1332	0	354	71	3075
81	2000	6	29	23	1355	3	357	57	3132
82	2000	7	13	25	1380	0	357	69	3201
83	2000	10	12	10	1390	2	359	41	3242
84	2000	11	9	25	1415	0	359	69	3311
85	2000	11	30	24	1439	4	363	55	3366
86	2000	12	14	21	1460	0	363	57	3423
87	2001	5	17	23	1483	2	365	64	3487
88	2001	6	7	25	1508	2	367	69	3556
89	2001	6	28	20	1528	2	369	64	3620
90	2001	7	12	25	1553	1	370	69	3689
91	2001	10	11	21	1574	2	372	53	3742
92	2001	11	8	21	1595	2	374	51	3793
93	2001	11	29	20	1615	2	376	42	3835
94	2001	12	13	19	1634	0	376	48	3883
95	2002	5	16	22	1656	4	380	67	3950
96	2002	6	6	25	1681	0	380	71	4021
97	2002	6	27	20	1701	14	394	60	4081
98	2002	7	18	21	1722	0	394	63	4144
99	2002	10	17	21	1743	2	396	37	4181
100	2002	10	31	24	1767	1	397	42	4223
101	2002	11	28	20	1787	2	399	41	4264
102	2002	12	12	22	1809	0	399	47	4311
103	2003	5	15	32	1841	1	400	83	4394
104	2003	6	5	26	1867	2	402	70	4464
105	2003	6	26	29	1896	1	403	71	4535
106	2003	7	17	26	1922	1	404	77	4612
107	2003	10	16	26	1948	1	405	39	4651
108	2003	10	23	27	1975	1	406	41	4692
109	2003	11	20	21	1996	1	407	61	4753
110	2003	12	11	26	2022	1	408	57	4810

2003年で終了

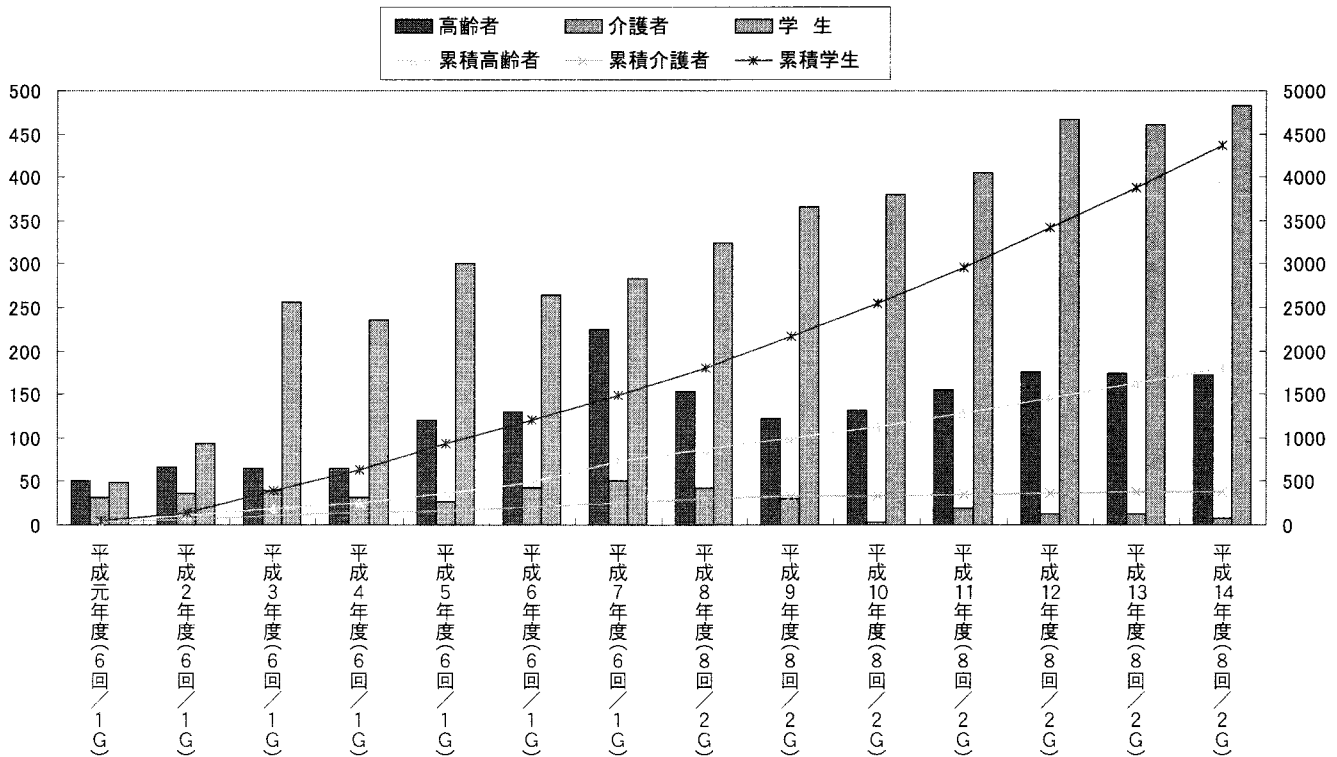


図1 高齢者教室 年度別および累積参加者数

表2 担当教員とプログラムの推移

実施年度 (開催回数/グループ数)	担当演習教員	
	I 部	II 部
平成元年度 (5回/1G)	臨床動作法 (蘭・長野)	
平成2年度 (8回/1G)	"	
平成3年度 (7回/1G)	グループワーク (蘭)	臨床動作法 (長野)
平成4年度 (7回/1G)	"	"
平成5年度 (7回/1G)	グループワーク (蘭・滝口)	"
平成6年度 (6回/1G)	グループワーク (蘭・滝口)	"
平成7年度 (6回/1G)	福祉レクリエーション (滝口)	"
平成8年度 (8回/2G)	"	"
平成9年度 (8回/2G)	"	臨床動作法 (長野・花田)
平成10年度 (8回/2G)	"	"
平成11年度 (8回/2G)	"	"
平成12年度 (8回/2G) ※	"	"
平成13年度 (8回/2G) ※	"	"
平成14年度 (8回/2G) ※	福祉レクリエーション (滝口・山田)	臨床動作法 (花田・長野)
平成15年度 (8回/2G) ※※	"	"

※ 年2回は化粧療法

※※年2回は化粧療法、2回は料理教室で副島担当

(4) スケジュール

木曜日 I・II 限目に実施していたが、標準的なスケジュールは以下のとおりであった。

9時	～9時30分	受付
9時30分	～10時30分	第I部 福祉レク
10時40分	～11時30分	第II部 臨床動作法
11時30分	～11時45分	昼食準備
11時45分	～12時30分	昼食・閉会式

(5) 年間授業計画

年度によってわずかつ変更があったが、筆者らが担当した臨床動作法を8回連続して実施した最後の年である平成11年度の授業計画を表3に示す。

表3 年間授業計画
(授業内容とスケジュール、平成11年度)

第1週	ゼミのオリエンテーション
第2週	高齢者に対する臨床動作法の概要説明、実技練習
第3週	高齢者教室のカルテおよびビデオで各事例を検討し、運営準備を行う。
第4週	第1回高齢者教室実施 (5月)
第5週	フィードバックセッション
第6週	事例研究
第7週	第2回高齢者教室実施 (6月)
第8週	フィードバックセッション
第9週	第3回高齢者教室実施 (6月)
第10週	フィードバックセッション
第11週	事例研究
第12週	第4回高齢者教室実施 (7月)
第13週	フィードバックセッション
第14週	前期復習のまとめ
第15週	試験
第16週	事例研究
第17週	高齢者教室のカルテの検討、各事例の問題点把握
第18週	第5回高齢者教室実施 (10月)
第19週	フィードバックセッション
第20週	事例研究
第21週	第6回高齢者教室実施 (11月)
第22週	フィードバックセッション
第23週	第7回高齢者教室実施 (11月)
第24週	フィードバックセッション
第25週	第8回高齢者教室実施 (12月)
第26週	フィードバックセッション
第27週	事例研究
第28週	これまでのケースワーク体験学習の総括
第29週	後期復習のまとめ
第30週	試験

(6) 学生の学習内容

高齢者教室自体の目的は2(1)で述べた3点であったが、臨床動作法を実施した演習そのものについては大別して3つの学習内容を含むと考えられた。

- ① 言語面接 (ケースワーク) の側面での学び
- ② からだの動きを通した関わりでの学び
- ③ 教室運営という役割遂行に関わる学び

3. 臨床動作法の取り組みを通した学生の学び

年間を通して、学生が高齢者と1対1で面接し、臨床動作法を行なった結果どのような教育効果をもたらしたかについて、15年間の成果を総じて論じることはきわめて困難であるが、卒業後、社会福祉の実践現場に携わったときに大学でのこの体験学習がどのように関連しえたのかについての検証が必要となってくる。しかし、これは一つの演習のみならず、本学の大学教育そのものが卒後の社会での活動にどう結びついているのか、というテーマをも包含している。

本報では、臨床動作法実践を年間通して8回連続して実施できた最終年である平成11年度の学生と参加高齢者に対する質問紙の結果について検討を加えたい。

(1) 演習 (教室) 参加に対する学生の主観的評価

対人援助技法を実践的に学ぶには、どの程度主体的にその活動にかかっているかが問われる。そこで、毎回演習終了後、学生の演習に対する参加の度合いを主観的に評価させた。7件法で1 (まったく参加できなかった) から7 (しっかり参加できた) の評定である。

年間通して全部の回 (8回) 参加した学生11名 (男5名、女6名) の結果は図2に示すとおりである。

結果について、平均値の差の検定を行なったところ、1回目と4回目の間に5%水準で有意差が認められた。すなわち学生の主観的参加度は総じて高いため大きな変化は見られなかったが、回を重ねることに参加意識が高まることが示唆された。

学生の体験的な学びに関しては、数値的な変化では捕らえがたい側面があるため、以下(2)(3)(4)においては学生自らの記述を通して検討していく。

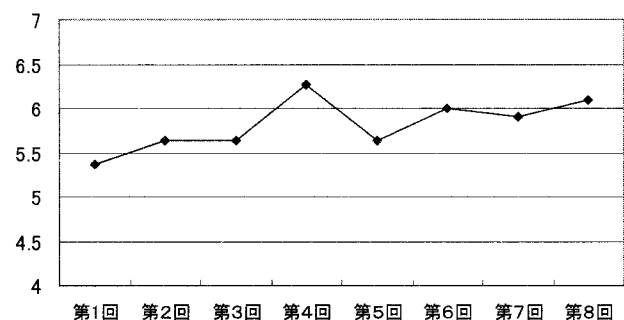


図2 学生の参加度の変化

(2) ケースワーク的なアプローチに関する学生の気づき

臨床動作法実施の前には個別面接の時間をとり、最近の様子や体調面などについて話をきいている。この時間のみならず、出会ってから見送るまでの時間を通して、単なる世間話をするのではなく、学生には面接技法のひとつとして傾聴、受容といった基本的な構えを身につけることが望まれた。

この点に関して、年度の終わりに提出したレポートによる記述を原文のまま記載する。

<男子学生T>

高齢者教室を通して私が最も緊張したのが「会話」である。そのような中で、私が特に感じたことは、1年間を通して、同じ高齢者の方と一緒に過ごさせて頂いたのだが、緊張して上手く話をする事ができない私に対して、高齢者の方からよく話をされて、私の緊張がほぐれたことを今でもよく覚えている。

また、印象に残ることとして、私のことを「孫」みたいに思ってくださって、私自身大変喜んでいたことが印象に残っている。

今回の教室によって、私自身が上手く話をする事ができないことに気づくことができたし、また、このことが将来の自分にとってきっと役に立つと感じた。

(現在、特別養護老人ホーム勤務)

<女子学生H>

私は相手の話を聞いて、受容・共感することに重点を置いて会話を進めた。Aグループの担当高齢者の方は2年前から来ていたので雰囲気的にも慣れていたので進めやすかった。話をすることによって相手の性格や興味を理解できるだけでなく、仲が親密になっていくのが伝わってきて大切な時間であることを再認識した。Bグループの方は今回が初参加の方だったので不安な様子が見られたが会話を進めるうちに雰囲気にもなじんできた。来年度からも元気に参加してもらいたいと思う(現在、病院の医療ソーシャルワーカーとして勤務)。

<女子学生O>

高齢者とは年代も違い、ものに対する考え方や気持ちが私たちとは少し違うと思っていた。しかし、担当した高齢者はとても活動的な方で、恋愛に関しても昔から心広く認めていたようで、高齢者にしては珍しいのではと思った。

また、会話する中で、相手の生活が見え、ほんのささいな話題のなかでもその方の表情や話し方を見ると、その方の気持ちや伝えたいことなどが伝わってきたように思う。

この相手の気持ちや伝えようとしていることを少しでも分かっていくことがケースワークには大切なのではないかと思った(現在、特別養護老人ホーム勤務)。

<男子学生M>

高齢者と話をする際、初めて話すときは緊張と不安があり、スムーズに話せなかったことを覚えている。よりよい会話をするためには2回目以降では担当高齢者の趣味や興味、関心のあるものについての話をすることや、そのことに対する自分が思うことを付け足しながら素直に対応することが良いと思う。また、家族や、特に孫の話をする楽しそうに答えを返してくれると感じた。

今年私が担当したMさん、Oさんは会話が楽しくスムーズにできた。高齢者の方と会話するときのポイントは(相手にもよるが)相手の言うことを丁寧に、素直に聞くことや自分のほうから積極的に話すことだと思う(現在、特別養護老人ホーム勤務)。

(3) 臨床動作法によるかかわりによってもたらされる気づき

<男子学生T>

臨床動作法を行なっていく中で気づいた点としては、高齢者の方々は、何事にも熱心に取り組んでいる姿勢が印象に残っている。また、自ら積極的に動作法をされることはもちろんのこと、どの部分が痛いのかを分かっている、そのような中で、私自身どのように接してよいのか分からなかった。特に高齢者の方が、「私は背中が曲がっているだろ?」と言われた時には、どのように答えてよいのか分からなかった。そういった疑問点を、反省会を通して克服していったことに関して良かったと思う。

<女子学生H>

会話をすることによって親密になっていくが、臨床動作法をすることによって体と体を触れ合うことはもっと親密になることだと思った。触れ合い、同じ目的を持って動作法に取り組むことによって意思の疎通をすることができることに気づいた。

私の担当高齢者の方は年をとることによって背中が曲がってきたり、体がかたくなってきたりしていることに敏感で気をつけていることを知った。内面的な部分でも毎日お化粧をする、1日1回は出かけるなど気を配っていた。女性として人生の先輩として体とこころの活性化に気をつけているのを見て自分もそうなりたかったと思った。

<女子学生O>

動作法のトレーナーは担当の方に指導というか“こんな感じですね”というように動作法の仕方を自分が理解しなければならないということで、それがまた相手の体にどう感じているかなど見えない部分での訓練の理解が必要だと感じた。

直接、高齢者の体に触れ、動作法を共にする中で、

相手の動作で苦手な部分やきつい部分、逆に楽な動作や得意な部分が見たり、触れたりすることでよく観察でき、理解できると思った。

<男子学生M>

高齢者の臨床動作法ということであったが、実際には私たちにも関係していることを学んだと思う。普段は何気なく身体を動かす行為というものに一つ一つ注意して動かしてみると、あらためて力のかけ具合、かかり具合というものがわかった。

高齢者のサポートをする際に最も重要なことは「声かけ」だと思う。一つ一つの動作をする際に声をかけることは担当高齢者の感じることを知るだけでなく安全面への対応へも関係していると思う。

今後どのような職場に行くか分からないが、すべての仕事に共通しているのではないかと思う。

(4) 教室活動の運営面に関する気づき

<男子学生T>

運営する側に立って気づいた点としては、高齢者の方々に楽しく過ごして頂くために、私たちの係や役割が最も重要であり、また、1回の教室が終わった時に達成感が大きいことに感動をおぼえた。

また、私は3回目の教室の時には、マネージャーをやり、あの時は他の係の状況を把握したり、出席される高齢者の方々の確認をするなど、パニックになったことがあり、そして私はこのときも高齢者の方についており(担当)、運営していくことの厳しさと高齢者の方について接していくことの両立が上手くいかず、両立していくことの重要性を学んだ。

<女子学生H>

少しがんばりすぎて人の分までやったことを反省した。みんなできちんと役割分担どおりに全員でできるように、何回も集まったり準備をすればよかったと思った。しかし、そうすることはむずかしく、まわりの人たちと協力していく中で多少意見のズレなどもあり全員がきちんと準備に参加することはできなかった。

<女子学生O>

一つのこういった教室などを開き、スムーズにやっというふうにするには係の人だけ、自分の仕事だけをこなせばよいのではなく、他の係の人でも、この教室全員が協力すればうまくスムーズにいくと思った。

自分の担当する高齢者のことだけでなく、この教室に参加してくれるほかの高齢者、全員の顔や名前など、少しの情報でも知っておくことが大切だと思った。

<男子学生M>

私は高齢者教室の係として、すべての係りを体験した。まず、マネージャー、サブマネージャーについて、リーダーシップをとることの難しさを思った。4年生

になって知り合った人や、経験したことのない活動であり、人を動かすというよりも、まわりの人に動かされ、助けられたと思う。

次に受け付け。非常に大切な仕事だと思う。高齢者の方がお見えになってから一番最初に挨拶をかわすのが受け付けであり、相手にこれから行うことに対して不快感を持って行ってもらうわけにはいかないため、気を使う面があると思う。

一つ一つの係が大切であって、楽そうに見える駐車場や受け付けなども大変であると思うし、すべての係のうち一つでも手落ちがあるとすべての係だけでなく(I部の方へも迷惑をかけることになるのでしっかりと与えられた仕事をこなしていけないといけないと思う。

(5) その他の気づき

<男子学生T>

高齢者教室を一年間通して、特に感じたことは、学生(若い世代)と高齢者の方々が接することによって、笑いや喜び、考えさせられることが多くあり、学生時代の間によい経験をすることができ、大変良かったと思う。特に喜びの中では、高齢者の方に、元気の源はあなた達みたいな若い人達と楽しく接し、会話することだと言われた時には、私達自身大変うれしく思えることであり、また、高齢者の方々にも喜んでもらえて、両者の間に良い関係が成立していると感じた。

<女子学生H>

高齢者教室に参加して、高齢者に興味を持てた。そういう意味で視野が広がるいい体験になった。また、演習を通して新しい友人ができたり高齢者の方々とおしゃべりしたり人との出会いができた一年間だった。運営など大変なことがたくさんあったけど有意義に過ごすことができてよかった。

<女子学生O>

動作法については自分自身があまり理解できていないことがあったので自分がしっかり分かるまで指導してもらったと思った。

<男子学生M>

今まで行ってきたゼミとは違い、みんなでまとまって一つのことに對して行うものであったため、友達や知り合いが少なかった私には非常に良いものだった。

高齢者教室では、高齢者との接し方というよりも人との接し方について学べたことが良かったと思う。そして、高齢者の方と接することが楽しくなり、最後の時には「もう終わりか」「もう少しやりたかった」という気持ちがあった。最初は「楽そうだな」「一限目から来なくていいし」とか思って始めて、回が進むごとにどんどん忙しくなっていくで大変だったが、途中から木曜日の時間がどんどん楽しみになっていった。

この高齢者教室で学んだことや過ごしたことを忘れることなく、今後の自分の仕事や人生に生かして生きたいと思う。最後に「本当にもう少しやってみたかった」という気持ちがある。

以上の感想からは、まずケースワーク的なアプローチにおいて、学生は担当の高齢者と会話する緊張感、不安感を強く感じる自分に気づきながら、相手の気持ちに寄り添おうと様々な工夫を自らが自発的に行ない、次第に相手とのラポールを形成していく実感を得ているさまが読み取れる。異世代間の理解に関しても、考え、感じ方の異なる点だけでなく自分たちと重なり合う点を見出している。参加高齢者は比較的健康度の高い方であり、高齢者の方からの学生への働きかけも積極的であった。必ずしも学生側の働きかけだけによって親密感が深まったのではなく、高齢者側からの肯定的な感情表現に支えられ相互作用として学生が相手から受け入れられたという体験を得ている面も大きいと考える。

さらに臨床動作法による関わりを通して、学生は会話を通して得られる以上の理解を示している。動作法実施の際の学生のスタンスは、高齢者自らが動作法を行う補助をする、というものであり、高齢者の自発性や能動性を重視している。補助するものとして高齢者のからだに触れることにより、高齢者特有のからの動き、かたさを感じることは言うまでもないが、さら

には高齢者自らのからだへの向かい方、老いへの構えを知る契機となっているのではなかろうか。

他の演習に比べると、本演習では教室運営面での学生の準備や負担は大きい。そのなかで学生はグループとして凝集性を高めて達成することの難しさやリーダーシップのとり方を試行錯誤している。各係を経験することで係間の有機的な関連性に気づき、グルーブマネジメントの能力が少しずつ培われていると考える。

この演習を通し、臨床動作法の技法を学生が学ぶことのみならず意義があったのではなく、臨床動作法を軸として自己理解、他者理解、グルーブダイナミクスの理解といった多元的な学びを深めたと考える。また高齢者ひいては人との接し方を単に技法として学んだのではなく、相互に親和的な関係の深まりを実感している。回数を重ね、このプロセスを踏むことは、将来対人援助職を目指す学生にとって他者との関係性の構築を知る契機となったと考える。

4. 高齢者にとっての臨床動作法の実施度および気づき

本報は学生の学びについて検討することが主たる目的であるので、補足的ではあるが参加高齢者にとっての臨床動作法の実施度、継続性、有効性に関するアンケート結果をここで示す。

36名の参加者に5件法で質問した結果を図3-1～4に示す（平成11年11月25日、12月9日に実施）。

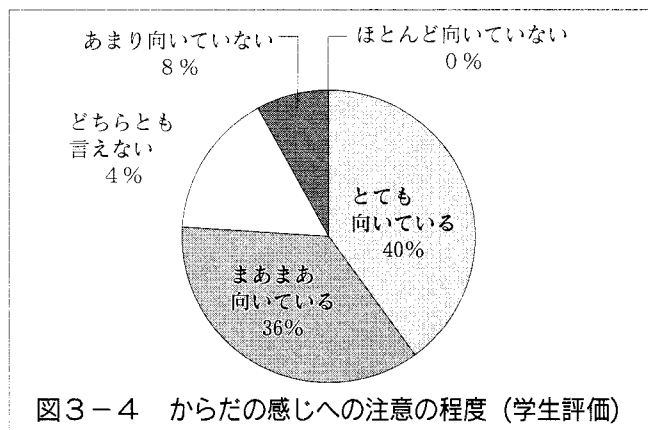
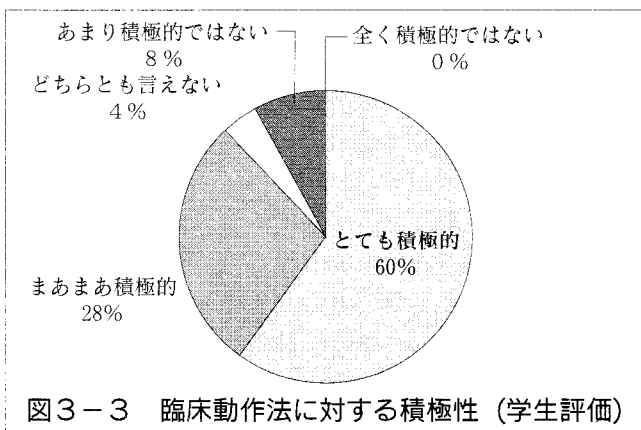
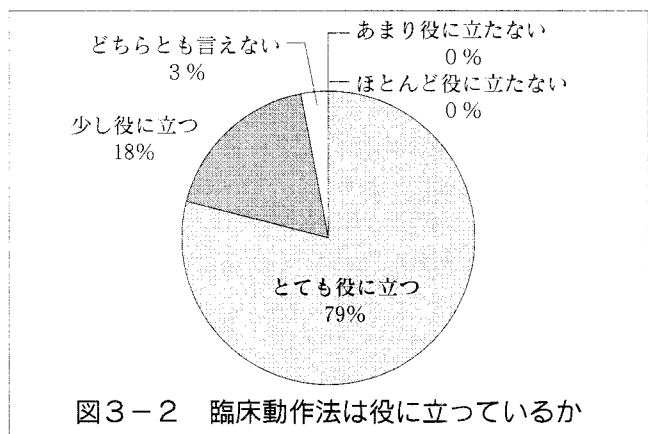
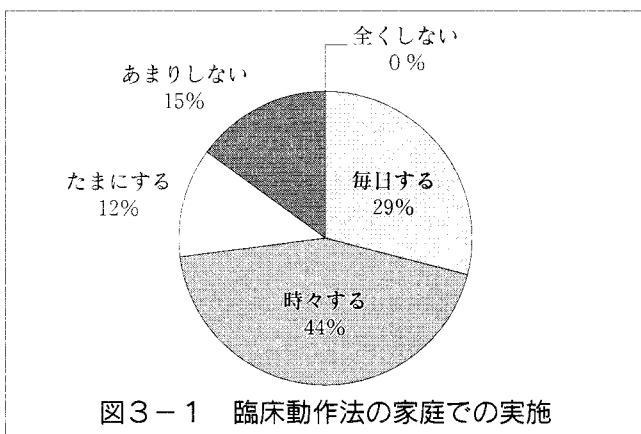


図3-1（「臨床動作法を家庭でも行いますか？」）、図3-2（「臨床動作法は役に立っていると思いますか？」）については高齢者からの回答である。さらに図3-2に関しては、どんな点で役立っているかを聞いたところ、重複するものを除くと以下のような回答が得られた。

- ・転倒防止や健康増進
- ・筋肉の衰えを防止、維持する
- ・自分の身体の自己管理のため
- ・日常やっているダンスに通じる
- ・家で行えて肩が凝った時などにするとほぐれる
- ・気持ちがいい
- ・姿勢が良くなる
- ・身体が温まる
- ・家事など家の仕事のことで疲れにくくなった
- ・腰が痛くなるのを防ぐ
- ・体が動きやすくなった
- ・立ち上がったるときに役立つ
- ・あまり動かさない部分を動かすことができる
- ・自分の体と向き合う
- ・体のバランスが確認できる

結果からは、73%の人が毎日もしくは週に1回以上は行っていることがわかった。また、図3-2に臨床動作法の有効性については79%の人が「とても役に立つ」と回答しており、健康増進のためという漠然としたものから具体的な日常動作や特定の部位への気づきまでの広がりがある。

図3-3（「臨床動作法は積極的にできていますか？」）図3-4（「からだの感じに注意が向いていますか？」）については臨床動作法を教室で実施している際にどの程度積極的に高齢者の方が行っているについて、担当学生から評価した際の回答である。結果からは、とても積極的、まあまあ積極的をあわせると88%のひとが積極的に行っており、からだの感じへの注意の向けかたについても76%の人がとても、もしくはまあまあ向いていることが明らかとなった。

以上、高齢者教室の15年間の取り組みを報告するとともに、臨床動作法を柱とした対人援助技術の習得を目指した体験教育の中で学生がどのような学びをしたかについて考察を加えた。今振り返ってみると、実際のところ高齢者の方から学生を育てて頂いた、という感が強い。教員も学生と高齢者の橋渡しをするなか、毎年出会いと別れを見ながら4月になる度に新たな教育のあり方を工夫してきた15年であった。継続できたのは「ここに来るのが楽しみです！」「学生さんに会ってエネルギーをもらっています！！」という高齢者の方々の澁淵としたお姿と期待の声であった。

この教室を経緯して巣立っていった学生は、ほぼ全員が福祉実践分野に就職し、その大半が高齢者施設に勤務しているが、この活躍こそが何よりの成果ではなからうか。しかし、大学での学びがその後どのような影響を与えているのかについては今後の検討課題としたい。

参考文献

- 1) 成瀬悟策編「障害児のための動作法」東京書籍 1984年
- 2) 日本臨床動作学会編著「臨床動作法の基礎と展開」コレール社 2000年
- 3) 中島健一 「(痴呆) 緘黙老人—身体のかんじを“味わう”—」九州大学教育学部附属障害児臨床センター編『動作法』＜障害児臨床シンポジウム第1巻＞、九州大学教育学部附属障害児臨床センター、p 39-46、1986年
- 4) 中島健一「鬱老人への動作療法」翔門会編『動作とこころ—成瀬悟策教授退官記念シンポジウム』九州大学出版会、p 230-238、1989年
- 5) 大川絹代、進藤啓子、長野恵子、蘭香代子：「高齢者および障害児・者における実践研究—10年間の実践の考察—」永原学園・西九州大学・佐賀短期大学 紀要、27、p 263-274、1997年
- 6) 社会福祉教育実践報告書—実践活動10年目を迎えて—昭和63年から平成8年度の実践録— 学校法人永原学園西九州大学発行、1997年
- 7) 長野恵子「体のリフレッシュ法」蘭香代子・長野恵子・石山勝巳編著『上手に老いを生きる』北大路書房1991年
- 8) 蘭香代子「高齢者の臨床動作法」現代のエスプリ『臨床動作法シリーズ3 健康とスポーツの臨床動作法』98-111、至文堂、1992年
- 9) 蘭香代子「脳卒中後遺症への臨床動作法」リハビリテーション心理学研究、20、p 97-108、1993年
- 10) 長野恵子「高齢肢体不自由者（脳卒中者）の臨床動作法」リハビリテーション心理学研究、20、p 109-119、1993年
- 11) 長野恵子「動作法」『医学・看護・心理学的援助方法 ホームヘルパー養成研修テキスト1996年改訂版—1級課程（第4巻）』p 118-128 財団法人長寿社会開発センター発行
- 12) 長野恵子「動作法」中島健一編『高齢者のこころのケア』p 61-120、小林出版、1999年
- 13) 長野恵子「高齢障害者のための動作法」成瀬悟策編『講座・臨床動作法③・障害動作法』学苑社2002年